

問題一

たとえ一回でもきちつと影響を受けたなら、それは① **師弟** 関係だ。また、「二年間この人に教わろう」というように期間限定で師を持つても構わない。人生を見渡したときに、「あの時期、あの人に教わったことは自分の中に生きている」と思うような経験を持てることはとても幸福だと思う。

しかし、師弟関係を② **未来永劫** 続くもの、続けなくてはいけないものというふうに考える必要はない。のちに別れていってしまうこともある。そのくらいクリーンでクリアな関係が望ましい。

福沢も**洪庵**をそのような意識で選んでいる。当時、福沢は洪庵を日本一実力のある学者だと見て師と③ **仰** いだ。だが、いつまでも適塾にいるつもりはない。そこはやがて卒業する場所だという気持ちがあったはずだ。

ところが現実の関係を見てみると、深い絆がある師弟関係ほど、そのようにさっぱり別れていくことが難しい。先輩と後輩、上司と部下という場合にもそうしたことがまある。

たとえば、初めて就職した先の上司にかわいがられて、毎晩その上司と飲んでいるような関係がそうだ。最初は刺激的な先輩だと尊敬し、自分にとっても活力となっていたが、途中から上司が伸び悩み、愚痴や不満のぶつけ合いなどの繰り返しになってしまふとする。それがわかっていても、いままでの義理もある、関係もあるというので、部下からは断りにくい。結局部下は「つきあってやっている」というような気持ちで発展のない関係に甘んじている。

このように、いつの間にか師匠の方が弟子に依存してくるケースが意外に多いのだ。師匠選びの意識に欠けていると、切りにくい関係、いわば泥沼づきあい④ **膨大** に時間とエネルギーを⑤ **費** やしてしまうことになる。

つまり、師匠を選ぶときに大事なことは、師となる人の実力を見ることはもちろんだが、弟子に見返りを要求しないメンタリティを持つているかどうかを見極めることもポイントだ。

見返りを求めない精神とは、何か。その師匠自身が充足しているために、ある弟子の面倒をずっと見ているようなベッタリした関係を好まない。もしくは経済的に安定していて弟子からの収入をアテにしていないというようなことだ。

端的な例が家元制度である。このシステムの場合、弟子は師匠にいわゆる上納をしなければいけない。年会費、協会運営費など、⑥ **名目** はさまざまだが、師匠から弟子、孫弟子とその⑦ **連鎖** が延々続いていく。もつとも、弟子はやがて師匠になっていくわけだから、持ちつ持たれつと言えるかもしれない。

(『座右の論吉』 齋藤孝)

(註) ★1 「福沢」 福沢諭吉。 ★2 「洪庵」 緒方洪庵。 ★3 「適塾」 緒方洪庵の開いた私塾。

設問一 □ 内、①～⑦の漢字を平仮名(ひらがな)に書き換えなさい。

設問二 右に傍線のある語句(A)「やがて卒業する場所だ」という気持ちがあったはずだ」について以下の設問に答えなさい。

① 「卒業する場所」とは、福沢の洪庵に対するどのような考え方を表しているか、本文に則して二十字以内で説明しなさい。

② このような「気持ちがあったはずだ」とは、福沢が洪庵をどのような人物と見なしているためか、本文に則して三十文字以内にまとめて書きなさい。

設問三 右に傍線のある語句(B)「そうしたこと」とは、どのような関係のことか。それを表す語句を、本文から六字で書き抜きなさい。

設問四 右に傍線のある語句(C)「見返りを求めない精神」と反対の意味を表す語句を、本文から二字の熟語で書き抜きなさい。

問題二

皆さんは、現在のロボットをどのように感じておられるだろうか。たとえば、コマーシャルに出ていたアシモというロボットは、二足歩行ができる。これをすごいと見るか、ロボットもまだまだだと思うか。アシモの動きはゆつくりとしていて、なんだか危なっかしい。コマーシャルに、あのロボットが電車に乗り遅れる場面があった。あれは A である。機能は不十分だが、それが愛嬌になっている。

しかし、二足歩行という、人間にとってはなんでもないことでも、ロボットにやらせるには長い ① さいげつ を要した。はじめは下半身だけのロボットが、たくさんさんの配線につながれてよたよたと歩いていた。転ばずに足を踏み出し、重心を移すための制御方法は、② しこうさくご の末にようやく生み出された。人間なら当たり前の二足歩行ですら、それだけ大変だった。アシモにちゃんと動いてもらうには、いまでも専門家がつきつきりで面倒をみる必要があるらしい。

人間は細胞一つくり出せない。昆虫をロボットでつくれといわれても、完全なものはいくらでもない。二足歩行だけでも大変なのに、脚や触角を自在に動かしたり、飛び回ったりする昆虫をつくるのは、とてもできない相談である。自然をまねしようすると、自然というシステムの力がどれほどのものか、それがわかる。

ロボットの研究をけなすつもりではない。それどころか、B ロボット研究は、これまでの科学の方向を変えるものである。そこに大きな意味がある。私はそう考えている。これまでの科学は、③ たいしょう を細かい単位に分け、それらを一つずつ理解するという、還元主義的なやり方で進められてきた。そのやり方でさまざまな知識を得ることができ、それを応用した技術が大きな ④ せいか を上げてきた。

しかし、そうした知識や技術だけでは、システムはうまくつけれない。構成要素の働きがわかっても、要素がたくさん集まり、それぞれに相互作用しているときに、どんなことが起こるか、それは簡単には導けない。構成要素がたがいに作用を ⑤ およ ぼし合う、そうしたシステムを理解することは、まさに困難な仕事である。これは、これまでの科学が正面からは取り組んでこなかった問題なのである。

ロボットをつくるには、生物のシステムを理解し、それをまねたシステムをつくり上げればいい。ところがこれは、これまでの知識を動員すればなんとかなる、という仕事ではない。ロボット開発は、自然のシステムのみことさを知るだけでなく、これまでの科学が置き去りにしてきた「システムの理解」という問題と向き合う研究なのである。人間のように動き、しゃべる「人型ロボット」の研究では、日本は先進国である。欧米では、⑥ ぐうぞう を嫌うとか、人をつくれるのは神だけと考える宗教的な基盤が理由となって、人型ロボットは評判が悪く、研究が本気では行われていない。科学者も宗教に縛られるのかと不思議に思う人もいるだろう。しかし、欧米で自然科学が発達しているのは、日常生活のなかで C に科学的な考え方をしているということであり、その分だけ反科学的な考え方も根強いということである。科学と宗教は、大きな目で見れば、相互補完的なのである。

(「いちばん大事なこと」養老孟司)

設問一 □ 内、①～⑥の平仮名(ひらがな)を漢字に書き換えなさい。

設問二 A、C には、どんな語句が入るか。次の中から最も適当と思われる語をそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア、総合的 イ、一時的 ウ、意識的 エ、象徴的 オ、現実的

設問三 右に傍線のある語句(B)「ロボット研究は、これまでの科学の方向を変えるもの」とあるが、「ロボット研究」はどのような研究であるか。それを表している語句を本文から十一字以内で書き抜きなさい。

設問四 右に傍線のある語句(D)「科学と宗教は、大きな目で見れば、相互補完的なのである」とは、どのような点で相互補完的であるか。それを説明する箇所を四十字以内に要約して書きなさい。

問題二

その中に能勢が、自分の隣のベンチに腰をかけて、新聞を読んでいた、職人らしい男の靴を、パッキンレイだと批評した。これは当時、マッキンレイと云う新形の靴が流行ったのに、この男の靴は、一体に光沢を失って、その上先の方がはっくり口を開いていたからである。

「パッキンレイはよかった。」こう云つて、皆一時に、失笑した。

それから、自分たちは、いい気になって、この待合室に出入するいろいろな人間を① ぶつしよく しはじめた。そうして一々、それに、東京の中学生でなければ云えないような、② なまいきな悪口を加え出した。そう云う事にかけて、ひけをとるような、おとなしい生徒は、自分たちの中に一人もない。中でも能勢の形容が、一番

③ 辛辣で、かつ一番諸諺に富んでいた。

「能勢、能勢、あのお上さんを見ろよ。」

「あいつは河豚が孕んだような顔をしているぜ。」

「こつちの赤帽も、何かに似ているぜ。ねえ能勢。」

「あいつはカロロ五世さ。」

しまいには、能勢が一人で、悪口を云う役目をひきうけるような事になった。

すると、その時、自分たちの一人は、時間表の前に立つて、細かい数字をしらべている妙な男を発見した。その男は羊羹色の背広を着て、体操に使う球竿のような細い脚を、鼠の粗い縞のスボンに通している。④ ふちの広い昔風の黒い中折れの下から、半白の毛がはみ出している所を見ると、もうかなりな⑤ 年配らしい。その癖頸のまわりには、白と黒と格子縞の派手なハンケチをまきつけて、鞭かと思うような、寒竹の長い杖をちよいと脇の下へはさんでいる。服装と云い、態度と云い、すべてが、パンチの挿絵を切抜いて、そのままそれを、この停車場の人ごみの中へ、立たせたとしか思われない。——自分たちの一人は、また新しく悪口の材料が出来たのをよろこぶように、肩でおかしそうに笑いながら、能勢の手をひっぱって、

「おい、あいつはどうだい。」とこう云った。

B、自分たちは、皆その妙な男を見た。男は少し反り身になりながら、チョッキのポケットから、紫の打紐のついた大きなニッケルの懐中時計を出して、丹念にそれと時間表の数字とを見くらべている。横顔だけ見て、自分はすぐに、それが能勢の父親だと云う事を知った。

しかし、そこにいた自分たちの連中には、一人もそれを知っている者がいない。だから皆、能勢の口から、この

⑥ 滑稽な人物を、適当に形容する語を聞こうとして、聞いた後の笑いを用意しながら、面白そうに能勢の顔をながめていた。中学の四年生には、その時の能勢の心もちを⑦ すいそくする明がない。自分は危く「あれは能勢の父だぜ。」と云おうとした。

するとその時、

「あいつかい。あいつはロンドン乞食さ。」

こう云う能勢の声がした。皆が一時にふき出したのは、云うまでもない。中にはわざわざ反り身になって、懐中時計を出しながら、能勢の父親の姿を真似て見る者さえある。自分は、思わず下を向いた。その時の能勢の顔を見るだけの勇気が、自分には欠けていたからである。

「そいつは適評だな。」

「見る。見る。あの帽子を。」

★⁶「日かげ町か。」

「日かげ町にだってあるものか。」

「じゃあ博物館だ。」

皆がまた、面白そうに笑った。

〔父〕芥川龍之介

〔註〕★1「赤帽」駅などで、乗降客の荷物を運ぶ係員、ポーター。★2「球竿」長さ一メートルほどの体操用具。木製の棒の両端に小玉が付いた形状をしている。★3「寒竹」日本自生の竹で、太さは一センチほど。ステッキや傘の柄としても好まれた。★4「パンチの挿絵」風刺画。「ボンチ絵」ともいう。★5「中学の四年生」旧制中学校の四年生。現在の高校一年生。★6「日かげ町」現東京都港区新橋辺り。古着屋が多くあった。

設問一

内、①～⑦の平仮名（ひらがな）は漢字に、漢字は平仮名（ひらがな）に書き換えなさい。

設問二

右に傍線のある語句（A）「ひけをとる」はどのような意味か。次の中から最も適当と思われる語を選び、記号で答えなさい。

ア、やる気にならないこと。

イ、誰かと同じように行動すること。

ウ、落ち着いて考えること。

エ、競争で、他の人に負けること。

オ、気が弱くてできないこと。

設問三

B には、どんな接続詞（つなぎことば）が入るか。次の中から最も適当と思われる語を選び、記号で答えなさい。

ア、けれども イ、そこで ウ、また エ、ところで オ、すると

設問四

右に傍線のある語句（C）「聞いた後の笑いを用意しながら、面白そうに能勢の顔をながめていた」とき、彼らはどのような気持ちであったのか。本文に則して二十五字以内にまとめて書きなさい。

設問五

右に傍線のある語句（D）「その時の能勢の顔を見るだけの勇気が、自分には欠けていた」ことについて、なぜ「自分」には「能勢の顔を見るだけの勇気」がなかったのか。その理由を説明した次の文の空欄①、②に適当な語句を補いなさい。ただし、①は、本文から十七字で書き抜きなさい。②は、気持ちを表す言葉を五字以内で書きなさい。

能勢は、彼の父親に対して「ロンドン乞食」という（ ） ① （ ） になってしまった。皆がふき出したが、「自分」は、きつと能勢が（ ） ② （ ） 気持ちでいるに違いがないと思って、能勢の顔を見ることができなかった。